

# 華人經濟 經營研究

～彼れを知らず己れを知らざれば戦う毎に必ず殆うし～

中国本土からアジア地域、そして世界にまで活動範囲を拡大するチャイニーズ。彼らのビジネスに対する考え方や習慣は日本人からすると異質にして独特で、理解しづらいものだといわれている。チャイニーズを総合的に「華人」ととらえ、彼らの多様な伝統文化と長い歴史から導き出された経営思想、心理と行動を体系的に分析し、華人圏や中国への進出に伴う総合的なノウハウを学び合う関西日本香港協会のみさんの研究の成果を紹介する。

C  
M  
M  
S第11期修了

にあたつて

2003年から開講したCMMSが11年目に入り、その第11期は九州会場を加えた3会場として実施したが、この9月25日に無事に終了した。本期は理論編・実践編すべての受講者が3会場合せて37名、部分受講者が9名の合計46名でスタートしたが、その結果満たした修了者は29名（東

京4名、大阪12名、九州13名)で全体の63%を占めた。比較可能な条件で過去11年間を見ると第9期の66%に次いで二番目に高い数字である。会場ごとの修了比率では九州がトップで100%、大阪が80%、東京が44%であり九州の健闘が目立つた第11期であった。

前開始した本人自身が想像もつかぬことであった。修了式では受講総括をするのだが、今年は興味深い統計を皆に披露した。それは西暦1年から2000年までの世界6地域経済によるGDPシェアを示した棒グラフ。6地域とは(1)西ヨーロッパ、(2)アメリカ・豪州他周辺国、(3)アジア、(4)旧ソ連、(5)ラテンアメリカ、(6)アフリカである。

日本には多くの大学が社会人向けビジネススクールなるものを2000年代より開始させているが(院生を排除した社会人だけの大学院)、11年続く社会人スクールはそう多くない。CMSが大阪で始まり東京に飛び火し九州に拡大して11年目を迎えるとは、11年

(1)と(2)を足して歐米にしてよう。愕然としたのは産業革命前後の1500年にアジアがなんと72・4%ものシェアを持ち、その欧米がなんと9・8%しかなかつた事だ。しかし産業革命後の1870年には欧米は45・1%となり、アジアの40・2%を抜く。

ショック、EU危機以降、8年間の世界GDPシェアは、終にアジアが44・6%、欧米が衰退はじめ、2009年には世界経済が中国大陸を中心とした私塾である。78年のユ

るであろうと予感した者達である。いち早くその根源を知り未来を先取ろうと試みた者たちがCMMMSを始めたのである。

よりは平和的財交換システムで互いの富を拡大させたアジアの歴史的智慧がふんだんに読み取れるのである。

革命以降世界を席巻した歐米とりわけ米国がこの動きをけん制するのは当然でありTPPはその表れでもあります。アジアは未来に向け



【古田茂美（ふるた・しげみ）さん】香港貿易發展局日本首席代表。国際基督教大学大学院行政学研究科博士前期課程修了（行政学修士M.P.A.）。香港中文大学大学院崇基書院経済学研究科交換留学。神戸大学大学院経営学研究科博士前期課程修了（経営学修士M.B.A.）。立命館大学大学院国際関係研究科博士後期課程修了（国際関係学博士Ph.D.）。1982年、香港本局に初の日本人スタッフとして入局。大阪事務所長などを経て、2005年より日本首席代表

【日本香港協会全国連合会】  
<http://www.jhks.gr.jp/>  
【関西和僑会】<http://kansai-wakyo.com/>

京4名、大阪12名、九州13名)で全体の63%を占めた。比較可能な条件で過去11年間を見ると第9期の66%に次いで一番目に高い数字である。会場ごとの修了比

前開始した本人自身が想像もつかぬことであつた。修了式では受講総括をするのだが、今年は興味深い統計を皆に披露した。それは西暦1年から2008年までの世界6地域経済による全GDPシェアを示した棒グラフ。6地域とは

アジアの富の中心が中国であることは明らかだが清朝衰退と欧米によるアジア浸蝕後、1950年までにそのシェアは58・9%（欧米）と19・2%（アジア）と大きく開いていく。そして惨めなアジアの時代が到来する。

革開放以降の中国と華人社会の接近をいち早く感じとり、この動きがアジアに大きな経済成長をもたらす予測した者達である。今、戦後の延長の中では欧米が導する世界秩序の中にいつが、近未来にはかつてのアジアが復活し世界経済で

成し、その領域に散在する  
各国がそれぞれの文化歴史  
を維持しながら中国と朝貢  
貿易を受けた歴史が紹介され  
る。朝貢貿易とは実は現在  
のWTOなど匹敵する膨  
大な国際貿易システムであ  
り、その駆動原理は儒教の  
「礼節」システムに他なら

ば、アジアはどのような国際秩序を形成し世界に影響を与えるのであろうか、上記濱下先生が描くかつての平和と富を並立させたアジアの国際貿易システムを支えた思想や哲学が再浮上することも一つの選択肢として重要だと筆者は思つてい

期的な新聞記事のようないくつかの問題を理解に終わらない。深く見えてない根源を知ることで中国の動き、中方企業の戦略を予見し対応できる能力を身に着けることを希求したのである。今年も29名のかような若い日本人ビジネス戦士が卒業した。彼らの今

率では九州がトップで100%、大阪が80%、東京が44%であり九州の健闘が目立つた第11期であった。

前開始した本人自身が想像もつかぬことであった。修了式では受講総括をするのだが、今年は興味深い統計を皆に披露した。それは西暦1年から2000年までの世界6地域経済によるGDPシェアを示した棒グラフ。6地域とは(1)西ヨーロッパ、(2)アメリカ・豪州他周辺国、(3)アジア、(4)旧ソ連、(5)ラテンアメリカ、(6)アフリカである。

アジアの富の中心が中国であることは明らかだが清朝衰退と欧米によるアジア浸蝕後、1950年までにそのシェアは58・9%（歐米）と19・2%（アジア）と大きく開いていく。そして惨めなアジアの時代が到来する。

革開放以降の中国と華人社会の接近をいち早く感じたり、この動きがアジアに大きな経済成長をもたらすと予測した者達である。今更に戦後の延長の中で欧米が導する世界秩序の中にいるが、近未来にはかつてのアジアが復活し世界経済で存在感を増すであろう、ここには中国華人社会のDNTAや伝統が基盤となつたたな国際秩序観が形成さ

成し、その領域に散在する各国がそれぞれの文化歴史を維持しながら中国と朝貢貿易を受けた歴史が紹介される。朝貢貿易とは実は現在のWTOなど匹敵する膨大な国際貿易システムであり、その駆動原理は儒教の「礼節」システムに他ならないことが解説される。膨大なGDPを実現できた根源には、このアジア海域貿易システムが存在し、戦争

ば、アジアはどのような国際秩序を形成し世界に影響を与えるのであろうか、上記濱下先生が描くかつての平和と富を並立させたアジアの国際貿易システムを支えた思想や哲学が再浮上することも一つの選択肢として重要なだと筆者は思つてい る。

理解に終わらない。深く見えない根源を知ることで中国の動き、中方企業の戦略を予見し対応できる能力を身に着けることを希求したのである。今年も29名のかうな若い日本人ビジネス戦士が卒業した。彼らの今後の活躍に期待したい。